開戦80年

「12月8日に開戦ではありません」

89歳鈴木さん 映像作品撮り続け

1941年12月８日の太平洋戦争開戦から80年となるのを前に、戦争被害者の映像作品を作り続けるフォトジャーナリスト鈴木賢士さんが「あの戦争はどうしておきたの？」と題して講演した。59歳で写真の勉強を始め、77歳でビデオカメラを買い、撮影も編集もナレーションもこなす89歳。９歳のとき始まった戦争について、今伝えたいこととは―。（橋本誠）

「学校で『十二月八日に戦争が始まった。作文を書け』と言われ、校庭の演壇で読まされました。少国民として頑張るぐらいのことを書いたのか、中身は忘れましたが、最後に『母の目に涙が光っていました』と書いたのは覚えています」

東京都品川区で五日に開かれた「しながわ平和のための戦争展実行委員会」の講演会で、鈴木さんが開戦時の記憶を語った。真珠湾攻撃成功の歓喜を書く児童が多い中、なぜ「涙」だったのか。「私は幼いころ、子どものいない家庭にもらわれた。反戦などという大したものではありません。せっかくもらった子を戦争で亡くすのはごめんだという気持ちがあったのでは」

東京・滝野川の生まれ。四五年の東京大空襲は、疎開先の千葉から真っ赤になった夜空を見た。自宅は焼けなかったが、戦後も東京に戻れず、進学を諦めた。「人生が最初から戦争に歪められた。腹の底から戦争に憎しみがある」

約三十年の雑誌記者生活を経て五十代で写真家に。中国残留孤児や原爆、沖縄戦など「戦争の後始末をしていない問題」を追い掛けてきた。二〇〇七年には、空襲で手に焼夷弾の直撃を受けた人や、機銃掃射で片腕を失った人ら数十人を撮影した写真集を出版。十二年前、交通事故で入院中に動画撮影を思い立ち、退院翌日にビデオカメラを買った。ほぼ独学で約三十本の作品を制作し、平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞などを受賞している。

「ぜいたくは敵だ！」などと書かれた標語を示し、戦争に総動員された国民生活を語る鈴木賢士さん＝５日、東京都品川区で

五日は、実行委の依頼で鈴木さんが今年八月に企画・制作したDVD「品川が焼け野原になった」を上映。一九四五年に東京南部を襲った城南空襲を体験した画家小島義一さんの絵を中心にした作品だ。炎の中を逃げ惑う人々や遺体を「泣きながら」描いたという約七十枚が、ズームアップを交えて映し出された。小島さんの言葉を「本人になったつもりで」読み上げた、落ち着いたナレーションが聴衆の胸を打った。

上映後、鈴木さんは「戦争が始まったのは十二月八日で